

# Hand On Heart

Johnny Pinkrose

タンブラーにマグカップと皿が何枚か。一人分の食器を幾つかと、コーヒーマーカーとフライパン。

衣類を除けば、荷物は、この位のものだ。後は、暮らすうちに徐々に買い足して行けばいい事だった。

新たな住まいは、以前と環境もあまり変わらない。少し、手狭になった程度だ。気候も良いので、もし今夜までに毛布を買わずにいたとしても、大して困る事もなさそうだ。

次の仕事も探さなければならない。食べていかねばならないのだから。『あんな事』があったのだから、もう薬剤師も含めて、医療関係は無理だろう。自分一人の事なので、食べていけるだけあれば、別に贅沢は言わない。幸い、エディには物欲も、特に趣味と言えるものもなかった。

ここも、誰一人知った顔はいない。少し南へ歩けば、一人ぐらい出くわすかもしれないが、行動半径によっては、その機会もないだろう。隠れるつもりはないが、かと言って、進んで誰かに会いたい訳でもない。スコットとは、連絡も取っている。黙ってどこかに行こうものなら、見つかった時に、殴られるだけで済むかどうか。友人に対してだけは、彼は容赦がないのだ。

拘置所を出てからは、しばらくこの辺りの安モーターに泊まっていたが、さすがに落ち着きたいと思って探したのだ。何かあった所で、故郷に帰ろうと言う気もなかった。『所帯じみた事』で気を紛らわす癖は健在で、考え事をしないで済むよう、部屋の掃除に買い出しに、と活発に動き回ったおかげで、わずか3日足らずで不自由なく過ごせる程度には片付いてしまった。流石に、まだ自炊出来るだけの用意までは出来ていないので、近所の探索を兼ねて、食事はデリやダイナーで済ませている。今日は、いつもよりも少し足を伸ばしてみようと思う。昼はスタンドのホットドッグで済ませたので、もう少しまともな物を食べようか。さほど食欲もないが。

鍵をかけて、階段を下りる。同じ住人と思しき男性が、すれ違い様に笑顔で『ハイ』と声をかけていく。このアパートでは、ほぼ男性しか見かけない。別に男性専用という訳ではない。ただ、クリストファー・ストリートにも近く、ゲイの男性が何人か住み始め、結果的に同じ嗜好の住人ばかりが集まるようになっただけだ。エディも、特に自分の性癖を隠すつもりもなくなっていた。黒い羊なら、黒いままでいい。黒いのがデフォルトである環境に身を置くだけの事だ。閉ざされた環境にいる事で、逃避した事になるかもしれない。しかし、偽ったままでいる事に比べれば、遥かにエディとしては進歩なのだ。

表に出て、朝食を取ったダイナーの方角へ向かって歩く。朝見た時に、その向こうにカフェカランチョネットのようなものがあつたと記憶している。

そのダイナーを通り過ぎ、路地を1本越えた所で、足を止める。店に入り、空席に案内されると、オニオン・スープとクラブハウス・サンドイッチを注文し、顔をあげた。

少し離れた目の前のテーブルに座った、ブルネットの男。その手にあるのは、ヴィレッジ・ヴォイス。冷酷そうに見える、ブルーグレイの瞳、がっしりとした体つき。

これはデジャヴユか？

男が立ち上がって、近づいて来た。エディのテーブルの前に立ち、人の良さそうな笑みを浮かべる。

「別れた彼氏に似てるかい？」

「いや」エディは男に笑みを返す。

「よく見たら、あんたの方が、いい男だ」

「ジェフっていう男、そんなに俺に似てた？」

「ジェレミー、今だけ司祭になったつもりで聞いてくれないか？」

「俺は信心深くないけどいいよ」

「今朝のニュースでやってた...アッパーイーストに住んでる医者がソープオペラの女優に撃たれて死んだろ？1人は重傷で」

「なんか、あったな。そういえば」

「ジェフってのは、その死んだ方の医者の名前だよ」

「彼女、メリッサをそそのかしたのは俺だよ。こうなる可能性もあったのに...本当の事を彼女に話してしまった。彼を...ジェフを傷つけるつもりなんてなかった。ましてや死んで欲しいなんて思った事も...」

「ちゃん泣かないと、余計苦しいんだ。これだったら、泣いてる顔も隠せる。俺からも見えない。今だけだ。今だけは、ちゃんと泣いておけよ」

「あの時のあんたは、俺にとって『藁』みたいなもんだったんだろうな」

薄汚れた天井を見つめ、エディはつぶやいた。

「藁？ひでえな」隣で、ジェレミーが喉を鳴らして笑う。数ヶ月前とは違い、ジェレミーのアパートだ。

「俺は藁じゃなくって『シェルター』みたいなもんだったと思うよ、エディ。あんたは、そんな弱い奴じゃない。あの時は、受け止められない、いや、認めたくない現実から逃げる場所が欲しかっただけだ」

「そうかもしれないな」

苦笑して、エディは目を閉じた。

セミダブルのベッドは、エディのアパートにある据付けのシングル・ベッドよりは寝心地は良かったが、男2人が寝るには狭すぎる。必然、体は密着する。半ば横を向いたジェレミーの腕は、エディの臍の辺りに投げ出されている。

「逃げるのは、悪い事じゃないと思うよ」

ジェレミーは、エディを見透かしたかのように言う。

「自分を責めるのは、よしたほうがいい。誰にも、どうしようも出来ない事だってあるんだ」

「けど...」

「何をしたかまでは聞かないけど、まさか、人殺しをしる、なんて唆した訳じゃないだろ？なら

、遅かれ早かれ、起きた事じゃないのかな」

「覚えてたのか？」

「あれから新聞も見て、あんたの事を探してた。自分が一目惚れした相手に自殺された日にゃ、こっちが死にたくなる」

驚いてジェレミーを見ると、照れるでもなく、エディの顔を見て笑みを浮かべている。

「あのカフェに行きゃ、また会えるんじゃないかと思って、しばらくは通ってたんだぜ？諦めて、頻度を落としてたけど、今夜は行ってて正解だった」

ジェレミーのおおらかな愛情表現に、エディは嘔き出した。

別れ際、ジェレミーから手渡されたメモには、彼の自宅と勤務先であるパブの電話番号が走り書きされている。捨てる気にもなれず、冷蔵庫にマグネットで留めた。まだ、この部屋には電話もない。

『今回は逃がさない』

そう言って笑ったジェレミーに従い、その夜は彼の部屋で過ごした。朝起きると、ジェレミーが、トレイに温めたビスケットと共にコーヒーを載せて持ってきた。

『王族でもなった気分だ』

そう笑うエディの頬に軽くキスし、トレイをベッドの上に置き、ジェレミーもすぐ傍に腰を下ろした。

何くれとなく世話を焼くジェレミーに従い、何をするでもなく、彼のアパートで1日を過ごした。結局、部屋を後にしたのは、彼が出勤する時だった。

『世話を焼かれる立場』は、くすぐったいものだった。

この1、2年、自分がジェフの世話を焼く立場だった。愛情を注いできたのか、と問われれば、自信はない。頭にする事を、務めて避けて来たような気がする。自分の本当の気持ちにも蓋をして来た。気づいた時は、既に手遅れだった。

誰かから愛情を受ける資格は、自分にあるのだろうか。ジェレミーから受け取ったメモを眺めて思う。そんな資格がないと思うなら、このメモは捨てるべきだ。けれど、捨てられなかった。

暖かい腕の中は、あまりにも蠱惑的だった。

その日、エディは毛布を買いに出た後、部屋に電話を引いた。

開通させてから、まず電話したのはスコットの家だった。聞いておきたい事があったからだ。まだ、仕事を始めていない、今でないと出来ない事がある。それを済ましておきたかった。出来れば、自分の踏ん切りを付ける為に。エディの質問を聞いて、しばしむっつりと黙り込んだ様子のスコットは、エディに少し待つように言い、シアトル郊外のとある住所を告げた。続いて、アメリカン・エアに電話をかけ、チケットの予約を入れた。東西を横切るのだから、帰るのも夜中になるだろう。念のため、クローゼットからボストンバッグを出して来た所で、思い出したようにキッチンに行き、冷蔵庫に留めたメモを掴み、リビングに戻った。

「エディだ。電話引いたんだ。番号はx-xxx-xxxx。ちょっと出かけるんで、明日はいないけど... また」

最低限の用件だけを告げて、受話器を置いた。荷物をバッグに詰めると、早朝の便しか取れなかった明日の旅の為、早めにベッドに入った。

ケネディ空港から約5時間のフライト。エメラルドとも謳われる、全米一治安が良いと言われる都市、シアトル。時差のせいで、こちらはまだ昼にもなっていない。

コンコースAに出て、目に飛び込んだのは、明るい日差しだった。東とは、マンハッタンとは、同じ緑があっても、全く違って見える。

通称、シータック(Seatac)空港。ちょうどシアトルと、自然豊かなタコマ市の中間にあるためそう呼ばれるこの空港は、シアトル市内ダウンタウンへの無料バスも出ており、交通の便もよく、ビジネスでの利用客も多い。人ごみを縫って、まずはバス・ターミナルへ出て、バスへ乗り込む。時間帯にもよるが、この時間であれば、ダウンタウンまでのバスは無料なのだ。遠くに霞んで見えるニードル・タワーが、彼の地へ来た事を実感させる。花屋を探して、小さなブーケを作って貰った。更に乗り継いで、ヴォランティア・パークへ向かう。その北側にある墓地が目的地だった。

庭園を抜け、著名な俳優親子が眠る墓もあるという、墓地に入る。目的の墓の前に来ると、家族が置いたのかもしれない、しおれて枯れた花が、ガラス瓶とともに転がっていた。枯れた花を抜き、持参したブーケを挿して、立てた。

『ジェフリー・ウェイン・テイト 1959 - 1991』

彫られた名前を覆った土埃と枯れた芝を手で払い、その手をさらに自分のジーンズで軽く払った。その場にかがみ込み、名前を見つめる。

(ジェフ...俺を恨んでる？メリッサに本当の事を言ったのは、俺だよ。きっと彼女が、あんたかクリスに言っただろうけど)

話しかけた所で、返事がある訳でもない。自己満足かもしれない、とは分かっていた。しかし、停滞したままであろうと、一步でも前進するのであろうと、一度は此処を訪れるべきだと考えていた。でなければ、誰が許しても、自分が許せない。

(あんたは、俺の事をどう思ったか知らないけど、本当は、俺はあんたの事が大好きだった。今になって認めるなんて、遅すぎたよな。もし、本当の気持ちをちゃんと伝えてたら、あんたはクリスの所には行かなかったのかな？いや、結局は誘惑されたのは変わらないかもな。あのクリスの事だし)

心の中で呟いた言葉に、エディは苦笑する。そう。たとえ、ジェフはエディの気持ちを知っていても、きっと誘惑には勝てなかったろう。エディの為に貞操を守る、とも考え難い事だった。(けど、『あんな事』は起きなかったろうか？いや、それも、きっと無理だったろう。あんたは、クリスには勝てない。結局は、俺がクリスにはっきり言わなかった事が元凶だな)

クリスがどうしてるかは、知らない。スコットから、どこか中西部の都市に引っ越したとは聞いている。金持ちの家のやる事だ。対面を重んじて、全く知り合いのいない、ニューヨークでの事件すら伝わっていないような所にやったのだろう。あの事件以来、一度も顔を合わせていない

。彼は彼で、しばらく病院に入院していて、エディが出て来た時に、スコットからそう聞いたのだ。

クリスを恨んでいない、と言えば嘘になる。しかし、事を引き起こした責任は、自分にもあるのだ。彼を恨むのは、逆恨みのようで、後ろめたい。

(あんたがいない世界は、俺には時間が余り過ぎてしょうがない。もう、世話する相手がどこにもいないから)

ダウントウンに戻ると、近くのスターバックスを見つけ、軽く腹ごしらえを済ませた。特に観光目当てで来たのでもなく、目的も果たした。ジェフの故郷と言っても、何か詳しい話を聞いた事もない。実家を知っていても、訪ねる訳にもいかない。言葉が通じても、州をまたげば異国も同じだ。ウロウロした所で、何か得る事もない。ジェフの思い出も、ここにはない。

初夏が近いとはいえ、ニューヨークよりは涼しい気がする。街並み自体の『風通しの良さ』のせいかもしれない。夕方までに出れば、戻っても真夜中にはならず済む。再び、空港行きのバスに乗り込む為、エディは道を急いだ。



結局、アパートに戻ったのは、夜の11時を回った辺りだった。

半端な時間に出た機内食のお陰で、空腹も感じない。今から夜遊びに出る男達と階段で挨拶を交わし、自室の鍵を開けると、まだ生活感の乏しい部屋が迎えてくれた。リビングの灯りをつけ、まずはキッチンへ。コーヒーのセットをしてから、荷物を置いた。留守番電話のメッセージを知らせる、ランプの点滅に一瞬、どきり、とする。まだ、かつての記憶が抜けきっていない事に、笑いがこみ上げる。恐らく、スコットだろうと再生ボタンを押す。

『エディ。ジェレミーだ。もう戻ってる頃かな？明日、何も用事がなかったら、空けといてくれないか？じゃあ』

静まり返った部屋に響く声は、低いが温かい。その腕の中と同じように。思わず、笑みが浮かぶ。今夜は、ナイトキャップなしに眠れそうだ。

起きたのは、もう朝とは言え、日も随分と高くなってからの事だった。

これ程にゆっくりと寝たのは、いつぶりだろうか。夢にジェフが出て来たのは記憶しているのだが、目覚めた時には、もうどんな夢だったかも忘れてしまった。ただ、優しい記憶だけが残っていた。

(墓参りに行ったから、許してくれたって事かい？ジェフ)

シャワーを浴び、着替えて朝食を取る為に外出した。一昨日、ジェレミーに再会したカフェまで、足を伸ばしてみる。普段は、一番近くのダイナーで済ませるのだが。もしかしたら...、という自分の気持ちにも、薄々気づいていた。まるで、十代の少女のようだ、と自嘲の笑みが浮かぶ。それでも、あまり期待はしない方がいい、と自分に言い聞かせる。あれは、ジェレミーが自分を探す為にわざわざ出向いて来てたのだから。

店に入ると、いきなり誰かが手を振る姿が目飛び込んで来た。思わず口元が綻ぶ。

「こっちだ、エディ」

ダークヘアの、その男の傍まで行き、向かい側に腰を下ろそうとして止められた。

「お...っと、そっちは駄目だ。こっち」

ジェレミーは、自分から見て90度の角度になる、隣の椅子を引いた。注文を取りに来たウェイトレスに、コーヒーとツナサラダ、デニッシュを頼む。

「向かい合わせは、心理学上『対決の姿勢』なんだ。まだ、これから口説こうっていうのに、剣呑だろ？」

ジェレミーが、にっと歯を見せて笑う。どうやら、ジェフは許してくれたのだろう。『前へ進め』、と。

「何時から来てた？俺が来るかどうか分からないのに」

エディのジェレミーを見る目も、必定、優しいものになる。

「30分も待ってないよ。あんたはきっと来るって思ってたけど、昨日旅行だったら、そんなに朝早くもないと思ってさ」

ジェレミーは、何度か見ている人の良さそうな笑顔で、鼻の下をこする。

「嘘ばかり。はい、ジェレミー。あんたのおかわり3杯目のコーヒーね」

先程のウェイトレスは既に彼とは顔見知りなのだろう。にやにやししながら、ジェレミーのカップにコーヒーを注ぎに来た。エディは、嘔き出した。

「ありがとう」素直に口から出た言葉が、自分をも驚かせた。やはり、ジェフが背中を押してくれたのか。

「家財道具の買い物、済んだのかい？」

エディの言葉が聞こえなかったかのように、ジェレミーが話題を振る。

「いや、台所の方がまだ...」

「台所？料理するのか？」

「前は殆ど自炊してたよ。買いに出るのも面倒だし」

と、ジェレミーの目が光ったような気がした。

「うちに、埃かぶってる鍋やらなにやらあるんだけど...引き取ってくれないかな？その、ついでに作ってもらえたら、更にありがたい」

聞き返そうとしたが、まるで子供のような笑顔を向けるジェレミーに、エディは言葉が出なかった。

「構わないよ」笑いながら答える。

「食ったら、買い物行かないか？うちにあるものって言ったって、本格的に料理する奴から見たら足りないだろうし、エディが要るもの選んで、うちにあるものは買わなきゃいい。その後で、うちに飯作りに来ないか？」

ああ、誰がこんなオファーを断れるだろうか！

「ああ、いいよ。何がいい？」

結局、ジェレミーの家にあるものも、全て買い揃え、エディのアパートに運んだ。

『あんたのアパートから持って行ったら、俺はここで料理は出来ないけど...いい？』

ジェレミーはエディの一言で我に返り、結局、持ち帰らない事になった。それどころか、増えたものもあった。彼のアパートにあったのは、小さなフライパンが一つと、ミルクパンが一つ。これではスクランブルエッグを作って、湯を沸かす位しか出来ない。多少の深さのある大きめの鍋と、大きめのフライパンが一つ、更にチーズおろしにホイッパー。後は、なんとかなるだろう。

買って来たサーモンの切り身は、軽く塩をして皿の上に。その上に、スライスしたレモンを乗せる。フライパンには湯を張り、サーモンの載った皿を乗せる。火を付けて蓋をし、その間に鍋に別に湯を沸かし、沸騰したら、一掴みの塩を入れパスタを入れた。本来なら、もっと深い大きな鍋が要るのだが、贅沢はいえない。茹で時間さえ間違わなければ、そう大して味に変わりはない。プロではないのだから。

ジェレミーには、チシャをちぎってボールに入れる作業をさせた。以前、ジェフに手伝わせていたように。トマトを刻み、フェタチーズを小さくちぎる。残ったレモンも絞ってボール代わりのグラスに汁をいれておいた。

また『なんとなく始まった関係』の始まり。それは、エディも自覚している。恐らく、このまま続くのだろう。改めて考えると、それを当然と甘受して良いものなのか、と自問自答してしまう。確かに、ジェレミーと過ごすのは、彼と共にいるのは、エディにとって居心地良いものだ。しかし、彼がエディに一目惚れしたという事を利用してない、と言えるのか？彼にジェフの面影を見る事なく、愛情を傾けられる自信はあるのか？

「エディ？」肩を叩かれて我に返った。

「あ、ごめん。そのボール、貸して」

受け取ったボールに、トマトを入れて、絞ったレモン汁をふりかけ、軽く塩胡椒してからフェタチーズを加える。後は、サーモンとパスタの茹で上がりを待つだけだった。

「今夜、俺休みなんだけど、ちょっと飲みに付き合わないか？」

「いいよ」作業の手を休めず、答える。茹で上がったパスタを2本のフォークで器用にすくい上げ、湯を切って皿に盛る。皮を取ったサーモンを載せて、軽く身をほぐして和えれば出来上がりだ。やはり、トングは買っておくべきだったか、と後悔する。

(ああ、また悪い癖が復活したか)

我知らず、笑いが漏れる。悪い癖。考え事を始め、自問自答の中で、自分でも避けたい話になると、つい手元のドメスティックな雑事に逃避する。

パスタを盛り付けながら、一人で笑っているエディを、ジェレミーは怪訝な顔で見つめていた。

「料理なんて、誰に習ったんだ？」

旺盛な食欲を見せて、平らげていくジェレミーが口を開く。どうやらこの御仁も、ジェフと同じく、キッチンはコーヒーを淹れ、冷凍のピザを温める場所なのだろう。

「親父が商売やってて、お袋も手伝ってたから、家政婦で来てた人が俺の母親代わりみたいなものでね。かと言って彼女だって暇じゃないし、主に台所で遊んでもらってたから、そのついでに教えて貰ったんだよ」

「いや、本当に旨いよ」サラダは、殆ど食らい尽くされていた。パスタも、そろそろ完食しそうだ。

「お褒めに預かり、光栄」

「前に付き合ってた相手は、俺と同じく料理はからっきしだったから、手作りの物を食べさせて貰うなんて、いつぶりだ？もう...4...いや5年ぶりか！」

「前って、俺と初めて会った時、最近別れたって言ってた？」

「そう。4年半付き合ってた。向こうに好きな奴が出来て振られたんだよ。そいつからしたら、俺は『安全パイ過ぎる』らしい」ジェレミーは照れたように、鼻の頭を搔く。

「甘やかし過ぎるらしいんだよな。」急に頬杖をついて、ため息をつく。想像に難くない。彼の優しさは底なしで、どこまでも、際限なく相手を許してしまいそうに思えた。

「贅沢だな、その相手も」つられて、エディも頬杖をついた。

「そうだな...少しわがままな所があって、それも可愛いと思ってたんだがな...あまりにも、それを受け入れすぎるってんで、よく喧嘩になった。俺にしたら、なんで怒るのか分からなかったし、俺にはそういう風にしか愛情表現は出来ないしな...」

「きっと、叱って欲しかったんじゃないかな。子供が、親に構って欲しい時みたいにさ。」

「そう！そうなんだよ！」

きっと、前の相手は甘えていたのだろう、この心優しき大型犬のようなジェレミーに。あくまでも優しく受け止めるジェレミーに、もっと本気で取り合って欲しくて、子供が駄々をこねるように、わがままをエスカレートさせるのだ。本当に怒らせたかったのではないだろう。どこまでも、あるがままに受け止められて、自分が本気で愛されていない、本心から受け止めてもらえてない、と感じたのではないだろうか。

「今でも思い出す？」

自分の口から出た言葉に、エディは驚いた。自分は今、何を口走ったのか、と。

「たまにね」胃が、きりりと痛む。何故、自分が痛みを感じるのだ？自分が愛情を注いだ訳でもなく、自分のものでもない相手だというのに。

「で、やっと立ち直りかけた所に現れたのが、エディ、あんただ」

また、にっと歯を見せて笑う。

「俺が一目惚れって言ったの、信じてないだろ」ジェレミーは、わざと拗ねたような口ぶりで言う。

「素直に信じるほど、ナルシストじゃないよ」

見つめて来るジェレミーの視線を避け、エディは目線を下げた。頬杖をついていた彼の左手が、エディの肩を引き寄せた。バランスを崩して、ジェレミーの胸元に上体を預ける格好になる。

「じゃあ、どうやったら、信じてくれる？」

温かい声が耳元で響き、フォークを握っていたジェレミーの右手が、エディの顎をすくい上げた。

(信じられないのは、あんたの言葉じゃなく、きっと俺自身だよ)

エディの肩にかかっていた手が脇に回り、立つように促す。がたがたと音を立て、2人が椅子を足で軽く蹴るかのように脇へやる。唇を合わせていると、互いに徐々に息の荒くなるのが分かる。相手の背中に腕を回し、相手を自分の中に取り込もうとでもするかのように抱き合い、よろよろとした足取りで、キッチンからリビングへ、そして寝室へとなだれ込んだ。まだ朝の乱れたままのシーツの上に、エディが倒れこむ。

(俺が欲しいのは、この温かい腕の中か、それともジェレミー自身か?)

答えは、まだ出ない。ジェフの面影を探しているのではないか、その一時の錯覚で、自らを満たそうとしているのではないか、という疑念は晴れない。

忙しなく動くジェレミーの手が、エディのシャツを剥ぎ取り、自らのシャツも脱ぎ捨て去る。首筋を辿って耳元までたどり着いた唇が囁く。

「俺が、あんたを欲しがってる。あんたは、俺を受け入れてくれてる。今は、それだけしか考えるなよ。他の事は、今はどうだっていいんだ」

ジェレミーの、気持ちを見透かしたような言葉に応えるように、エディは彼の首をかき抱いた。

心地よい気怠さの中、汗ばんだ体のまま、抱き合っていた。離れ難いとでもいうように。互いのまだ速い鼓動が、ユニゾンを奏でている。荒かった息遣いは、静まった嵐のように少しずつ収まり、相手の肩を温めた。

「俺だって、オ－ウェンを...別れた前の相手を思い出さない訳じゃないし、頭の中でエディと比べたりしてないって言ったら嘘になるな」

耳元でジェレミーの声が響く。

「でも、いつかは忘れる。今だって、以前に比べりゃ記憶も薄れて来てる。けど、俺はきっと、エディの頭の中にいる奴には敵わない。これからもずっと」

「え？」 エディは体を離そうとしたが、ジェレミーの腕はしっかりと抱きしめたままで、動かさなかった。

「それは、あんたのせいじゃない。相手が特別だからじゃない。『死んだ人間』だからだ。死んでしまった相手の思い出っていうのは、時間が経てば経つ程、綺麗なものしか残らなくなる。だから、生きてる人間がどんなに足掻いたって、勝てる筈がないんだ。俺は、そんな物相手に勝とうとは思ってない」

肩口にあったジェレミーの顔が近づき、汗をかいて冷えた唇を重ねて来た。啄むように、何度も合わせては離れてをくり返す。

「だから、あんたは俺が誰かに似てるからとか何とか、余計な事は考えなくていいんだ。俺の事が嫌いにならない限り、俺のものでいてくれたら...」

再びジェレミーの唇が頬を伝って首筋、胸元へと移動し始めた。エディの背に回っていた右手が忙しなく動き始め、肌の上を滑っていく。荒くなり始めた息遣いの合間に、エディの名を呼ぶのが聞こえる。

どうして、自分をこうまでも求めてくれる相手を拒めよう。たとえ、彼に今は亡き人間の面影を重ねていたとて、彼ならば、それを打ち消してくれるのではないか。

徐々に荒くなる2人の息が、フーガを作り出す。互いの両手両脚が、相手を離すまいと絡み合う。

今、この時だけは、エディの頭の中に死んだ男の幻影は無かった。抱きしめる事の出来る、温かい体と、力強いその動きだけが、感じられる、触れる事のできる現実。そこに執着しなければ、ハデスに冥府へと連れて行かれるかのように、まるで、現実世界にとどまる為の命綱のように、ジェレミーを抱きしめる腕に力を込めた。今エディを抱いているのは、ジェフの幻影でも、そっくりな男でもない。ダークヘアにアイスブルーの目をした、ジェレミーという名の優しい男だった。

耳元では、その低い声がエディの名を呼ぶ。呼応するかのように、エディも彼の名前を呼んだ。

「もう一度呼んでくれよ...」

息の合間に囁く声がした。もう一度、その名を呼んだ時、抱きしめる腕に更に力が込められ、

唇が塞がれた。

「あの世の奴が迎えに来たって渡さないよ。せっかく捕まえたんだから...」

「作るのは、エディがしてくれたんだから」

そう言って、ジェレミーはキッチンの後片付けを始めた。

(確かに、ジェフとは大違いだ)

彼の厚意に甘え、その間にシャワーを浴びた。

交代でジェレミーがシャワーを浴びている間に、ベッドのシーツを剥がす。洗い替えがどこにあるのかは分からないが、取り敢えずこれは洗った方が良さそうだ。このアパートなら、確か1階に共同ランドリーがあった筈だ。さすがに鍵はないので、丸めて持っていけるようにしておいた。キッチンに戻り、セットしたコーヒーがドリップされた頃に、ちょうどジェレミーも出て来た。

「勝手に淹れたけど、飲むだろ？」

ジェレミーは、また『ビッグ・スマイル』を浮かべて、差し出されたマグカップを受け取った

。

「出て来たら、いなくなってるんじゃないかって心配だった」

「俺が？なんで？」

エディの座った隣に、ジェレミーも腰を下ろす。

「初めて会った時もそうだった。身投げなんかしないって言ってたけど、どこかへ消えてしまうんじゃないか、と思ってたんだ。粘った甲斐あって、こうしてまた会えたけど。ふらっと出て行って、もう帰って来ないんじゃないかって不安だった。だから、俺のだって、名札か首輪でも付けてやりたいって思ったぐらいだ」

そう言って笑う。

「その死んだ相手の事だけじゃない。何かこう、自分を責めてるように思ったんだ。俺がどうこう出来るなんて大それた事は思わなかったけど...何とか出来るものなら、したいって」

ジェレミーの癖なのだろう。また、鼻の頭を指先でかいている。エディは、カップをテーブルに置いて立ち上がった。エディを見上げるジェレミーの頭を、背後から抱きしめる。

「まだ、ちゃんと、ずっとあなたの事を見てるって約束出来ないけど、それでもいいか？」

「俺の大事な人でいてくれるんなら、構わないって言ったろ？」

「ふらふらして、どこかへ行きそうでも？」

「本当に縛り付けるつもりはないよ。どこかに行っても、ちゃんと帰って来てくれるんなら」

ジェレミーが、自分の首にかかったエディの手を軽く叩き、そのまま手首を握った。

ジェレミーが行こうと言った店は、ヴィレッジの外れにあった。あまり目立つ看板もなく、ウィンドウに小さな電飾で、店の名前らしきものが描かれている。『Jaded Heart』。

ドアを開けると、目に入ったには砂色の髪にジェレミーよりは明るいブルーの瞳の男だった。



「よお、来たか」

2人の姿を見るなり声をかける所からして、行きつけなのだろう。

「彼が例の？」

カウンターの中のその男が、口の端をあげて皮肉げな笑みを浮かべて言う。ジェレミーが、何か既にエディの事を話していたのだろう。

カウンター以外には、奥にソファが一つとテーブル。もう一つボックス席があるだけの小さな店だった。

ジェレミーに促され、カウンターに並んで座る。

「俺は雇われ店長のドンだ。で、いつから来てくれる？」

カウンターの中の砂色の髪の子、ドンが意外な事を口にした。隣で、ジェレミーは、また鼻の頭をかいている。エディには、さっぱり意味が分からない。いや…。

「仕事、まだ探してないって言ってただろ？ ドンが、ちょうど人を探してて…さ」

「まあ、そうなんだけど」

「なんだ、ジェレミー。話してなかったのか？」

ドンの視線は、顔立ちが整っている分、冷たそうに見える。皮肉げな笑みのせいかもしれない

「いや、あ、まだ言ってなかったんだ」

どうやら、そういう事らしい。特に職種を決めていた訳ではない。ジェレミーの選択なら、エディを悪いようにはしないだろう。

カウンターに座ったジェレミーが、おもむろにエディに向き直った。

「これが、俺の言ってた首輪代わりだよ。あんたが、勝手にどっかへ行っちゃまわらないように」

唇が塞がれた。ほんの数秒。

誰かのものだ、と言われるのも悪くないかもしれない。

黒い羊は、1頭ではなかった。

## Hand On Heart

<http://p.booklog.jp/book/64530>

著者 : Johnny Pinkrose

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/akafujimai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64530>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64530>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ